土佐物語

自二十五
至二十六

十三

和書門
二五〇七七 號
九五 函
一三 架
一五 冊
類

内閣文庫
和書 類
二五〇七七 號
一五 冊
一五一 函
一三 架
(三一才)

内閣文庫
番號 和25077
冊數 15(13)
函號 151 127

国立公文書館
National Archives of Japan

土佐物語　二十五　二十六

土佐物語巻第二十五

目録

小山へ注進の事
阿野津城合戦の事
本多佐渡守智謀の事
木曽路一揆の事
真田父子相別れ敵と成る事

明治十年騰寫

土左物語巻第二十五

目録

小山へ発進の事
阿野津城合戦の事
本多佐渡守智謀の事
木曽路一揆の事
真田父子相別れ敵と成る事
大聖寺城落去并義郷の事
浅井縄手合戦の事
會津山形取合の事

明治十年謄寫

村越茂助御使の事
新加納合戦の事
岐阜落城の事
瑞龍山稲葉山砦落去の事

日本政府図書

土佐物語巻第二十五

小山へ征進の事

去程に内大臣家康公七月六日江戸へ御着坐而軍の御評定有て同十九日中納言秀忠卿江戸御進發下野國宇都宮に御着陣あり同廿一日内府御出馬同國小山へ着御ましける処に誰いふともなく石田治部少輔五畿内中國南海四國の軍勢を率し伏見より押寄るなと云出しけるとも實否慥ならす扨いかにと怪しむ処に山内對馬守一豊の北の方より飛脚来て一通の封箱を捧

て大坂の様躰を告られけり其故を尋ね聞けハ
石田治部少輔三成増田右衛門尉長盛長束大蔵
大輔正家ら諸國の軍勢催促の廻文對馬守の大
坂の館に到来も一豊の北の方ハ在大坂なりけ
迚ハ頓て彼廻文に一通の文を添て文箱に入田
中孫作と云者を飛脚にして関東へ差進しけ
る彼孫作甲斐にて數者なれハ袍を日に継て急
く処に伊吹山にて盗賊に衣裳刀脇差迄剥とら
れけりされ共大事の使なれハ些も働らけ文箱
を取持奉裸にて逃延行所に一人の老人に行逢

ひけり是天の與へと取て押へ衣裳刀脇さし剥
取着して小山へぞ着にける一豊ハ諸川の町家
に宿られけりしを夜半過に門を扣く彼文箱
を差出し大坂の荒増を申けれハ一豊野々村右
衛門九郎迅政を使として彼文箱封の儘にて小
山へ捧け上方騒動に就て大坂妻方より文箱さ
し越候須日の世上に於てハ嫌疑を憚り私に披
見を遂ん封の儘差上候とそ被申ける則右衛門
九郎を御前へ召直に被仰出けるハ上方騒動の
事必定計なく實否未慥ならさる処に早速注

進殊更婦人の文いかなる密事にあらん其儀を
不顧封の侭さし出しける心底信實篤厚の忠義
傳聞貪泉を百飲むとも心を變せんといひしは適武
士の手本なりと大きに御感賞あり則文箱を披
かせ御覧あれハ彼廻文に女の文を添たり老中
奉行達儀に反逆を企て人数催促の廻文なり彼
程に田中孫作は猜さも差卜し然常々の御志よ
彼人ハ申すもいつくに彼人とも上様へ能く忠
節操ハされ彼人構へて我身事御心苦敷被思
召聞食候叶はぬせんよりも自害を遂け人手よハ

内務省

懸り候由しるし一紙のうちに千萬の心緒を述
てぞ書れたり夫といひ女と云相叶ひさる心中
諺に云鬼の妻ハ鬼女也とハケ様の事をいふ成
べしと後進ハ御沙汰ありけるとぞ聞えし然ば進
を始めとして諸方より早馬をもて急を告る事
櫛の歯を引くがことし上下耳を驚かし肝をひ
やさずと云事なし前にハ強敵あり後よりハ大
軍押寄ると聞ゆこハいかに成行世の中ぞやと
二河の苦しみ忽来て通るへき白道ハなしと親
しきどちハ寄り合囁きあきれたり斯て数日過

内務省

評議有之被仰出候ハ何迚も妻子大坂にあり
見捨かたき事に急き帰上せらるへし然も遠慮
に思召され且味方よ志の方ハ奥州を可被攻欤
上方勢を可被討欤上下によらす所存を残さす
申出へしと仰出さる一座の人々目と目を見合
せ兎角詞も出さゝる所に對馬守進出今此期
に及んて妻子の為に義を捨道に背きて逆徒に
與しまするものハ壹人も候へからす候扨景勝ハ眉
なる候押の勢をさし向られ上方の大軍を御退
治可然候但上方道筋御心許なく可被思召候得

ハ先一豊か居城掛川の城を明御譜代衆へ相渡
し人質をさし上候盾しと被申けれハ満座此儀
に同し全く別心を存せさるへく候と各連判の起
證文を本多佐渡守して被差上ける去る程に諸
将評議一決して上らるへきに極りしかハ會津
の押へとして當國結城の城にハ内府の御次男
宰相秀康卿宇津宮にハ蒲生藤三郎秀行上州佐
野にハ佐野修理大夫政綱房州にハ里見安房守
忠義在城せ其外常陸上野の軍勢結城宇都宮に
差置る堀久太郎秀治領國越後に在りけれハ村

内務省

上周防守義明溝口伯耆守宣勝相随て在城す最
上出羽守義光羽州にあり伊達陸奥守政宗奥州
の領国にて在城を是等名も出張なし人々何れも堅
く御守を加へらる又斯て道筋の城々を明渡さ
せ大久保相模守ハ小田原の城にハ留守居計を
指置れ其外の城々にも番手を置る中村彦右衛
門ハ沼津の城ハ松平三郎四郎中村式部少輔ハ
駿府の城ハ菅沼志摩守山内對馬守ハ掛川の城
ハ内藤三左衛門堀尾信濃守ハ濱松の城ハ保科
彈正忠有馬法印ハ横須賀の城ニ三宅惣右衛門

池田三左衛門ハ吉田の城ハ松平和泉守田中兵
部少輔ハ岡崎の城ハ北條左衛門大夫なと皆城
々を請取各番手を勤めらる水野六左衛門ハ苅
谷の城ハ番手をこそ置れに福島左衛門大夫ハ清
洲の城ハ石川左衛門大夫松平玄蕃頭両人番手
を勤む毛呂崎の番手ハ松平又七郎小笠原新九
郎同安藝手賀孫左衛門大野正二両人の番手ハ戸
田三郎右衛門清水権之助上州高崎の番手ハ諏
訪小太郎勤めらる其上諸将人質を出され對馬
守ハ舎弟吉左衛良豊を出されける人質悉く小

田原の城ニ差置れけるか後ニハ皆在江戸なりしとそ聞えし

阿野津城合戦の事

上方勢伊勢路へ向ふと聞えしかハ要害ニ有て是を支へんとて御下知を承り小山より本國へ帰る人々勢州阿野津の城主冨田信濃守信高分部左京亮政善伊州上野の城主羽柴伊賀守定次岩手の城主稲葉蔵人頭通茂長嶋の城主福島掃部頭正頼今尾の城主市橋下総守多喜松本の城主徳永左馬助を始め其外数輩の手勢を引連てく

上りけるか中ニも冨田信濃守分部左京亮三州吉田より小船数十艘ニ取乗り勢州へ趣く処ニ九鬼大隅守賊船数百艘引連れ海上を支るよし聞えけれハ如何せんと船中評定しけるに信濃守申されけるハ九鬼ハ信高か旧友なれハ謀りて通るへしとて手勢十五六人召連レ一艘の船ニ乗て九鬼か船へ押し向ひ對面して被申けるハ上方御出勢のよし承り頻ニ関東を抜出し是より諸事申談し候へしと様々軍議を約諾して立別れ阿野津の城ニそ入ニけるか智略の程こそ由々敷

くれ分部左京亮ハ吾館上野ハ要害あしく抱へ
難しとて阿野津の城ニ加ハり東の門をそ堅め
けり吉田兵部少輔信勝東國より帰り松坂の城
ニ入て守りしといへども敵寄せ来らされバ只瞎
然として守居けらんハムちをし且後難遁れか
へしとて微勢を分て士十余人ニ軍勢少く差添
て阿野津の城へ差遣し南口をぞ守らせける
ける所に伊勢へ向ひける西國勢八月廿三日阿
野津攻とぞ定められける處に長宗我部土佐守
盛親家の子若黨召連て被甲けるが此度ハ國々

の軍勢馳會ける晴軍なれハ皆勇らしく先を争
ひ勇を励し手柄を專に心掛くへし然ハ只大方
に心得てハ却て不覚を取へし凡軍に望者活て
再ひ家に帰らんと思ふ者ハなけれとも殊更此
度ハ討死して一筋に思ひ定心を一致にして群に
抽て誉を顕かし天下の称歎を備ふへし就ハお
此の軍してハ士卒の剛臆分迷難し他の勢を交
へて一働きせんしとおもふに遅さるハ諸軍に先
きかけ押寄せよとて手勢七千余騎を引率し廿
二日の夜まだ子の刻計に陣を立城の大手に向

ハ関の聲三度揚け長宗我部土佐守盛親踏向ひ
しかり此御門をハ誰人の防守めけるや速に開て御
出あり味方の剛臆土左勢の手柄の程を見せ覧
せんとよはゝりけれハ城中よりハ是を聞て西国
に隠れなき長宗我部か近の軍を嫌ひ披懸しかり
し覚へたりいかゝ小勢なる者共なりとも所の案
内ハ知れは殊に夜ハまた深しいさゝらハ彼
所の難所に追詰討取んとて城兵門押ひらき打出て
敵味方入乱れ追つ返しつ挑戦ひけるか城兵終に打
まけて門より内へ逃け入るを桑名弥次兵衛南

岡田四郎兵衛吉田市左衛門大岐左兵衛江口藤内
中島藏人久万惣左衛門桑名甚五森九右馬允井
上六郎兵衛吉田孫右衛門国三郎左衛門中島与
市兵衛山内右京兵衛國澤民部近藤長兵衛野中
三郎左衛門宿毛甚左衛門竹内兵庫立石介兵衛
吉田平右衛門孫三郎大黒左衛門太郎長崎磯之
助徳井佐兵之助池田又兵衛野村孫右衛門下元
十兵衛近藤五兵衛横山新兵衛宮崎善右衛門宮
地団助横山九郎兵衛吉川善助福良介兵衛桑因
彦兵衛を先として是非なく追つ入りけるハ大手

の門を押破られ三ノ丸に逃込を寄手遮さんと押
入り面々ちら〳〵に互に打合切り合何迄勝負とも
見えさりける中にも東名内蔵允敵七騎か中に
取込められ冑も打おとされ大にうつ〳〵成て
戦ひけるか終に其所にて討死ける立石民部ハ
首一ツ取て立出る処を城の兵上淳掃部弓取て
つかひよつ引てひやうと射る民部か胴中を後
より前へ矢先六七寸計り射抜しかハ一言に不及
いは俯向に倒れけり掃部か弟式部其首を取んと
蒐寄る処を近藤兵蔵蒐向ひ死首を望と競ふ

ハ比興也其方の活首を奪らんとて走り懸りて打
合ひしか引廻して見えしか兵蔵式部を取て押
へ首掻きり是ヲ持城の活首よとて立出る元の
掃部是を見てこハ無念也と弓と矢を投捨て太
刀抜持て伐て掛る名札田左兵衛是にありとて
蒐向ひ終に掃部を討取けり其外目の前に伐て
落さるゝもの其数をしらす都て盛親の手へ討
取首数百六十三魁の討死東名内蔵允黒岩隼人
を始め究竟の士十三人雑兵九十八人也寄手の
諸軍勢此よしを聞てこハおくれけりとて大手搦

手一同に稲麻のごとく竹葦に均しく取囲て前後左右の合戦なく無法無躰に乗込て息をも継せず責たりける中にも毛利宰相秀元の先手中川清右衛門討死す井上清右衛門敵軍に紛れ二の丸へ忍び入翌日首二ツ取てぞ出にける其外寄手の軍勢思々に乱れ入り分捕高名せざるはなし冨田終に討負和を乞て城を出落髪して高野山へぞ入りにける内府天下御平均の後冨田召出され豫州宇和島を賜ひけるとぞ聞えし伊賀國上野の城主羽柴伊賀守東國より馳上りける処

に留守居のものはや城を明て敵に渡し新庄越前守受取て守りけるが道にて是を聞進退度を失ひせん方なく内府の勢を待て関東へぞ向ひける岩手の城主稲葉蔵人頭通茂手勢九百六十騎にて楯籠る九鬼大隅守押寄せ町口へ責入る所を蔵人頭打て出大に防き戦しかば大隅守如何思ひけん人数を引て帰りける長嶋の城主福島掃部頭東國より馳帰り居城に入山岡道阿弥は江州甲賀の兵七百八十騎を率して長嶋の加勢に籠る市橋下総守は今尾の城を守り徳永

左馬介ハ多藝松本の城を守りゐりされハ敵よ
り是を押へ或ハ此方より敵を支へ合戦逼合止
時なし

本多佐渡守籌謀の事

去程に小山よて内府江戸へ御帰陣に極り本
多佐渡守正信を召て御用ゐるハ秀忠ハ中前代（山道）
發向して信州を平均なへし然ハ景勝押へとし
て宇都宮の城丈夫ニ秀康を籠置へし景勝
武州へ出張せハ秀康是を押へ秀忠ハ真田伊豆
守残党として沼田より會津へ押入るへし景勝
前後ニ敵を受てハ引退くより外有へからす依其
時秀康まて蒲生藤三郎を魁首として白川口へ
押し諸勢て定め置こしとし最上信夫津川口より
義光正宗秀治等因時ニ責入り景勝を即時ニ討
亡ちへき事手裏ニあり然りとハへとも景勝関
東へ働きおちんハ構て此方より遮りて手立なへ
からす依鬼小角先ツ宇都宮の城普請依时ル急く
へしとて御ゐる佐渡守謹て承り御旋委細奉畏
依景勝関東へ出勢有へ也との御遠慮ニて宇都
宮城普請急きて可申旨誠ニ余儀なく覚て奉り依

候共退て愚案をめくらし候に今大勢を労し普
請を急かせ候事御發向の妨に候間ひとまつ見合し
て景勝關東へ出勢なき方便をなして城普請を
差止られ然るへくと候臣忠正信に御免し候ゆへ
討られ見候へしと申上られけれハ内府これに
ぞ聞すましけれ随分構へ見よとそ仰られける
佐渡守畏り御前を退て秋元越中を直江山城守
兼續か許へ遣して申けるハ此度家康公表へ
發向の意趣ハ其方并景勝卿謀叛の聞へ有に
依て被仰のよし豊光寺長老を差下されしの所
に山城守度々返答に内府を嘲哢悪口せらるゝにも
其方に依て内府深く憤り忽ち軍勢を率し下向
せられ候然るに此比上方一國に蜂起ありし
注進あり是を以て今度へ討らひ候る治部少輔
て謀計をめくらし候といへとも内府在大坂の程
ハ謀叛なかりしに依ていかにもして家康を東
國へ下さるへき爲の方便にして景勝卿と示し合せ
悪口嘲哢せられしと推量せられて将又ハ今
更遺恨にハ不被存候去に依て逆徒退伐のよし
内府近日上方へ被致進發候然るにおいてハ内府

内務省
内務省
国立公文書館
National Archives of Japan

の勝利疑ひなしされは宇都宮に殘し置せ給
内府の人数と景勝卿直に勝負させん不被成候へ
は後日に景勝卿に對し内府怨敵の意趣を殘さ
れへきと謂れなし景勝卿は大度の事にて候へは能
く御諫言有て関東へ御出張なき様に御調儀可
有候山城守殿は正信か互に家の權を取候へは
分別の二字簡要に候正信年来山城守殿へ申候
候故隔意を不存内意に及候全く偽なき心證の
ため愚息たる坊を人質に直江殿へ預け進し候と
委細に云含め十二歳になる末子に士三人差添

てそ進かしける秋元越中會津に至て事のよし
を具に申入しかは直江山城守熟く聞て思案し
けるかは三成最前の約に任せ内府関東へ下向あら
は海道を進て攻下り箱根に旗を立へきとの事なれ
りしか今に至て上方勢下向の沙汰なし是一ッ
又上方の勝利を丈夫に見付られは手控此方を
聞き不日に内府進發あらされは是二ッ主君中納
言殿も上方懸なる存念なき内は関東へ出張有
ましきとの内意也但山形は近里といひ日比意
趣ある事なれは先羽州へ發向あり山形を治め

内務省

其間に上方の様をも聞合すべし是保國を治る
外を伺ふの理あるべし是三ツ又山形を攻取る
にも暫く日を経べし然れハ人数を差越して
幸なれ先ッ本多と急事を謂へ甚だ不任をとる
んハ公私の爲然るべし凡事を破らハ安く繕ふ
ハうこし兵書に敵繫ハ足我携へしといへり
うにも許容せんにハ志のしと心中に一決して
秋元に向て申けるハ本多殿より被仰越旨趣一
々承り猶委細申傳言にも申聞せ給へし兼續存
命の程ハ當年の勢を關東へ出し事かなふらん

其頃御心易からべし次に杉坊殿事居城の上ハ
暫く留置呉るゝをまして事態に云合めて城中をハ
返しけり佐渡守悦び急き内府の御前に出事の
よしを具に申上けれハ大きに御感成しつゝ猶
直江表裏にて人数を留置事あらハ杉坊事如何
有べきとて仰けるハ佐渡守天下の爲幼少の悴事
聊も御心に被掛ましく其上山城と申者心底を
能計り思ふに假令主人の家ハ斷絶するも己か
家の興隆せん事を思ふ男なれバ上方と合戦は
勝利の上再び此地へ御發向におゐてハ山城彼

人数を随分大切に饗應し懇情を盡し此縁を以
家を立申へしと存し全く殺さぬ事能はまし此上ハ
景勝卿関東への出張ハ疑ひなき所なれハ宇
都の宮の御普請ハ被差止上方ゟ御進發可然旨
を申上られけれハ内府御許容有て秀康卿ハ宇
都宮へ御入城内府ハ江戸へ還御秀忠卿ハ中前
代御發向被成たり昔藤原仲光ハ一子を殺して
主人を助け今の本多佐渡守ハ男子を敵の手に
渡して大功を立つ忠智あり勇あり忠あり類ひ
無き良臣也と感せぬ人ハなかりけり後に本多

大隅守と云ひしハ此お坊の事なりけり

木曽路一揆の事

其後東山道御發向の詮議あり信州木曽路ハ山
道第一の難所なり其上石川備前守か代官の地
なれハ敵兵道を遮り通り得られん事容易からす
油し此道を開かるへき方便大事之幸彼地の旧
主木曽千次郎忍ひて此陣に供しけるなれハ
彼を呼出し木曽へ遣ハし旧好の者を進めて一
揆を催さを然るへしと以へとも彼ハ短才浅智
第一の男大切の計略をなさるへきなれハ昔の家

人ゝて召連こゝろよし聞ゆ此ハ其者の内試様ハ
申付よりて千次郎か家老千村平右衛門山村勘
左衛門馬場半左衛門といふ三人を召出し一揆の
次第を云含め金銀武具をそ賜はる三人承り家
の興隆時至りぬ有ることしと悦ひいさゝ宮の腰
と云所へ忍ひ行牢人并百姓共三百余人駈催し
紙ふて小旗を作り石川備前守か家人其外土方
よりたる兵とも変彼所に居たる處へ押寄
ここ弓を射鉄砲を放し家に火を掛け鬨を作り
攻かけ乱入敵ハ思ひもよらぬ儀事ふて周章

騒く処を突伏切伏せ薙倒しける程ふ討るゝも
の其数を志らす或ハ谷ゝけふ落又ハ味方ふ踏
ミ殺されけれとも敵ふ本合ハさんとする者一人
もなしとしや扶くるとも森林の内に逃入る残野
まても山ふも怪しき所ふハ火を掛け尋捜しける
程に敵十方に逃失ゝり扨て捲落ふあふ木曽の
山路を事もなく開きゝれ是と申ふ家康公の御威
光の有る処なり抑も彼木曽千次郎と申ハ朝日
将軍義仲より十四代の嫡流左馬頭義昌の一子
也代ゝ木曽に居住して義昌武田信玄と度ゝ合

戦しけるに負降参しけれバ木曽ハ高家なりと
て赦して信玄聟として本領を安堵せられける武田亡
びて信長公に属し其後家康公に随ひて家冨栄
えけるか千次郎不義詔還して所領没収せられ
漂泊せしか後葉をやわらひん今度思ひて閑
東へ供奉せしが其三人の家老の三被召出領知
被下千次郎ハ御沙汰なしも頓らに浪人程なく二十
四歳にて病死し木曽殿の嫡流ハ此時に至て絶
果けり

真田父子相別れ敵と成る事

内府會津へ御發向に付て相従ふ人々多き中に
真田安房守昌幸嫡子伊豆守信之二男左衛門尉
幸村とて父子三人あり其先祖ハ武田法
性院信玄に仕へて武藤喜兵衛と云て足軽を預
りし武功第一の士是ハ真田弾正幸信入道一徳
斎か子也則兄弟三人あり嫡子尾張守忠幸二男
兵部幸連三男武藤喜兵衛昌幸也然るに三州
長篠合戦に忠幸幸連討死せしかハ勝頼此喜兵
衛に父遺領を継せ真田安房守と改させ信州上
田の城に差置る勝頼滅亡して後ハ真田も信

長公ニ降テ本領安堵シテ其侭上田ニ在城せ信
長公横死の後真田上州ヘ赴テ出沼田の城を攻
取長男源三郎信之を入置処ニ秀吉公の御下知
ニ依て沼田を相州北条家ヘ被遣小田原より猪
股能登守範直ニ恩補有て沼田ニ在城せしか翌
年小田原落城して北条家滅ひ家康公の御領国
東ヘ国替有て家康公より源三郎ニ本の沼田を
賜り伊豆守と改名し本多美濃守の婿ニ成さ
る此女ハ岡崎三郎信康の息女の腹ニて内府の
曾孫也されハ伊豆守信之ハ内府譜代相傳の恩

ひを示しけるとそや去る程ニ真田父子ハ内府
ニ扈従して宇都宮の近所犬伏といふ所ニ宿陣
して居たりける斯る所ニ石田治部少輔より
使者来りて秀頼公の奉書也とて一通の檄書を
差出し父子三人列座せしかハ父昌幸取て拝見
ニて家康近年驕奢甚敷不義超過ニて依之可令退治
旨被仰出所也則去廿六日西国中国の面々伏見
の城を攻落し畢ぬ父子其旨を被存早速本国ニ
帰り軍勢を挙ケ家康征伐の計略簡要なり則信
濃上野可被宛行旨上意ニ依テ斯のことし八月

三日長束大蔵大輔正家増田右衛門尉長盛石田
治部少輔三成真田安房守殿同伊豆守殿同左衛
門尉殿へとて書ありけり昌幸ハ兼て此事を聞
及ひしかとも長男伊豆守とハ日来心意快から
されハ父子云談をも左衛門尉ハ二男なれとも
愛子なれハ内々云合せありしとて開封し昌幸奉
書を読畢て左衛門尉ハ是見よとて差出し左衛
門尉是に向て豆州御覧候へとて伊豆守奉書を
ハとらて父に向て何事に候哉安房守されハ此
程浮説の如く上方蜂起に依て味方に参へき旨

被仰下處也昌幸兼て奉行中と申合たる旨あり
父子一所に議定可有候へしとて被申けれハ伊豆
守謹て御家の儀ハ奉行中と日来御入魂と申但
内府と御中不快に候へハ上方へ御合躰被成事
も余儀なく覚まり候乍去信之ハ上方一味ハ存
す然仕候まし可述其故ハ未来内府の厚恩を蒙
る事諸人の存たる処に候然るに此期に及て仇
を以恩を報せん事豈人たるの道に候んや殊
更信之總て奉行中へ音信を通せす今上意と称
せらるへくとも彼に属せん事も本意に候はハ彼

と申送りいひ此儀におゐてハ御免候へと申け

れハ安房守源左様に申へきとて兼て察したる故に

内々にて云談をきゝたる之依て父子の申迄の事に

一所に安房を極め候へと重て被申けれハ伊豆

守如何に随ひ奉るへき事に候へとも最前申

出る通り候へハ父命を背き奉る事天地の容れ

さる所に候といへ共前世の業因にて残り候らめ

全く悔る処に候ハすと申ける素り父子不快

にして仇敵のことくなれハ互に驚く気色なく

父子東西に引別れ敵味方とハ成にけり例し無

き事とも也左衛門尉ハ大谷刑部少輔か婿なるに

石田治部少輔と常に親しけれハ父と同意して

大坂方に与し成に依て安房守申されけるハ斯の

ことく父子兄弟引分れ上ハ家人共の事昌幸

か手の者たりといふとも沼田に妻子ある者

ハ伊豆守に随ひて此地に止るへし又上田に人

質置たる者共ハ伊豆守の家人成共昌幸か供せ

へし此期に至て国を隔て妻子を取替る事も成

り難きそ海野等其旨を得よと堅く下知をそなし

けるか其後安房守伊豆守に向て昌幸沼田の城

ふを帰るへしと思ふ也異儀なく通し申へきや
と披申されハ伊豆守涙を流し其儀ニおいてハ
何の御怖畏か候とて披申けるかく讐敵とはい
ひなから流石に恩愛を忘れぬ事にてわかれな
れ斯て昌幸幸村ハ犬伏を立て信州へ帰りされ
ハ信之ハ急き沼田へ人を遣して此事を告知て
と又本多佐渡守を招て事のよしを語り聞せ御
本陣へ参へきや否をそ問れけるに佐渡守驚き急
き内府へ此由披露申されしハ伊豆守ニハ何の事
もなし早く来るへしと仰られハ信之ハ犬伏よ

り宇都宮へそ参りけるか去る程に安房守父子
ハ沼田まて至て暫く逗留して伊豆守の妻室の方
へ人して被申けるハ我ニ只今國許へ帰る也豆
州三歳の幼子に對面すへく候間是へ越され候
へと被申入られハ妻室の返答に豆州の御事御
父子引別れ敵方に成させられし上ハ先達て告来
り候然るに幼稚の者御覧成候ハんとハ人質
にとらせられん為にや又城下に緩々御滞留ハ
甚然るへく候ハ早速御帰城候へしとて返り
幼稚の息を遣ハさゝるのミならす家人にも下知

して旗馬印を四方に結ひて鉄砲狭間配りありて
則て見せられしかハ房州手をおろて去る者の娘
也心易き婦武と大に感し頓て沼田を出立て上
田へ帰城し防戦の術をまうけらる

大聖寺城落去並義郷か事

去る程に加賀宰相利長卿ハ北國の大将として
越後津川口より會津へ發向あるへきよし奉書
到来しけれハ堀久太郎溝口伯耆守村上周防守
等に牒し合せ既に加州を打立んと志しける
處に内府の御使として土方勘兵衛來て申ける
ハ内府野州小山へ御着陣の処に石田治部少輔
才覚を以五畿内中國西國一圓に蜂起するよし
諸方より注進あり是に依て會津をハ押へられ
江戸へ引返し早速帰陣有て逆徒を討果さる
へしと合戦ハ大略美濃尾張の間なるへし利長卿
も會津發向を止められ急き越前の方へ攻入申
さるへしとぞ申ける利長卿頓て打立給ふか初
會津發向の催促に随ハさる城々多かりし西國
に丹羽加賀守長重去る年松任より小松に移て
今在城あり長重利長と所縁の好ミ有といへと

九日来不和なれハ出勢を聞て是我遮らんと居
城ニ楯籠て防戦の支度頗也其外越前ニ大聖寺
寺の城主山口玄蕃允丸岡の城主青山修理北ノ
庄の城主青木紀伊守是等ハ初会津発向の時ニ
ら不随ハんとして此度三成諸国の勢を催し越
前なれハ敵となりといふ事有らんにより小松ハ
大名と云名城といひ是をせめハ日数を経るの
ことなりハ仮令討勝とも人数多く失ふへし只ニ
松をハ押へて柔城大聖寺丸岡北ノ庄等ハ皆ニ
敵なれハ一旦ニ攻亡し越前の勢を附北国悉く

うち治め美濃尾張へ張出城を構へ内府の上洛
を待合んへし内府若来りハ取て返し小松を攻
取へきなりと定めける迄ハ家臣を城ニ残らへり抜
とて同しく さらハとく高畑石見ニ一千余騎
桐添鋤の城ニ籠置越前の押へニ残し奥村伊豫
ニ三千余騎付て金澤の留守居とし我身ハ一万
余騎を率して八月三日居城を打立ちより小
松の後ニ鬼塲潟今井潟とて大なる二ツの池あ
り其間ニ小川数多流れたり其側ニ御幸塚と云
あり又粟橋井とて大川城を巻て南浅井北浅井

の間安宅の関の渡に渡る夜ふ入て利長此所
を押行くを小松勢出て防きけるを終ふ難なく
打過き高岡に陣を取りける翌日大聖寺へ
取懸惣構へを即時に打破り町中ふ押入る所に
城主山口玄蕃允正弘子息右京進満弘成田庄左
衛門同喜太郎阪田又六松井宗助是等を初めと
して其勢一千二百余騎城戸を閉て打て出数
に相戦ひ枕を双へて討死す玄蕃父子ハ比類な
き挙動して城に蒐入り倶に自害し果ける去
程に寄手へ討取る所の首数五百四十四とそ聞

さて備ル此山口玄蕃等か大聖寺の城を守りけ
る其故を尋聞ハ江州の傍に六角右衛門督義郷
といふ人有是ハ其先江州の太守なりしか去ル
文禄四年前関白秀次公誅伐の時六角も関白の
方人なりと石田治部少輔か讒言に依て既に誅
せらるへかりしを義郷の父義秀ハ故太閤の昔
廷弱の時烏帽子親にして義秀の秀を譲て秀吉
と名のりしを縁ふ其由緒有とて義郷をハ死罪を
免されて須知に放逐江州の傍にて居たりける然
に今度大坂に詮議有て此人を大将として北國

内務省

へ差向なハ昔の家人馳集り戦功有るへしとて
頻に使を遣はして近日昔の家人を催し北國表
へ發向有へし然るに於てハ本領相違なく宛行ふ
旨しとて三成以下の奉行連判の奉書を遣はさ
る義郷披見して使に向て被申けるハ今此時ニ
至て昔の家人を催し北國表の大將をせよとハ
義郷ニ一揆を催せとの天晴尾籠の雜言家の恥
辱末代の嘲り聞くも中々耳穢らはしとて云も敢
ず腰の刀に手を掛るとそ見えしか彼使者の首
を拔打に打落してそ捨られける　此由大坂へ聞

えしかハ諸將達縦令味方にこそ與ミせさら免
使者を討つといふ事やある前代未聞の曲言哉
末の懲らしめに急き討手を差下さんと何れも憤
て詮議ある中にも治部少輔申けるハ尤奇怪至
極何事か是に如かん然りといへとも彼人ハ代
々江州の大守なりしそかし今此人を披露せハ
國人昔の好ミを思ひ一揆を催さんハ必定なり
却て禍を招き候へし大事の前の小事且捨置候
候へ大行ハ細謹をこへりと候とて押申候へと
被申けれハ一座皆實もと同して山口父子成田

寺を加賀越前の境大聖寺に城を構へて立こもりし
北国を守らせ給ふとそ聞えし賊徒御平均の後
家康公彼六角か行跡を聞し召れ徳永式部卿法
印を使として義郷か許へ遣はし近日大坂へ来
臨あれ御対面有るへしと被仰しかハ六角謹て
被申けるハ忝き御使申も中々愚かに候へ共日本
第一御礼可申候へとも今牢浪の身に候へて世
を憚らハ一所懸命の地をも離りけんか虚也と
人に嘲哢せられ候はんハ面目なく候ハゝ是二ッ
過し夏秀頼公の御たのみもて北国表の大将に被
すに於てハ当国の太守に被成へしと仰を蒙り
候へ共辞引せしめん今内府の御旋に随ひ罷出
候ハゝ能く時を謀りたるものと諸人に笑ハ
れ候ハん是二ッ家康公へ何の働もなく今召出さ
此後にも頼り候へき是三ッ彼是と申せハ
御旋に随ひ奉り難く候間此旨よろしく被仰上給
ハり候へとて法印をハ被帰けり法印此よし被
申せしかハ内府聞召大に節をも張りし天晴本朝
の君子といふへし未タ文公にも遂ハさぬ事のを
しさよとて被仰けるとそ聞えし

浅井縄手合戦の事

さる程に利長卿ハ越前へ乱入せんと士卒勇ミ進む所に丸岡の城主青山修理北の庄の城主青木紀伊守方より同時に使者を越して申けるハ最前より味方に参し候先手可仕候へとも小松大聖寺両城を隔て候へハ心底不任候延引に及ひ候と是申候斯て細呂木に至り路に於て戸田武蔵守より使者来て一通の書を差出せし

其儀故大納言殿別而被掛御目難有仕合候へハ此度早々可馳参儀ニ候得共被隔大軍ニ黙止罷在候然者北国の大将として京極宰相大谷刑部二万三千の兵を率し敦賀を立て鯖波[江]の宿に陣取候又丹後若狭筈の勢ハ舟にて加州宮ノ腰へ打出り金沢を攻んと相定候此事為可申如斯に候恐惶謹言

七月廿五日　戸田武蔵守

加賀宰相殿御陣中

利長披見有て家臣を集め各異見を聞るに家老共是ハゆゝしき大事なり宮の腰ハ人数不足

旅人ハ大軍を拒き防かん事ハ叶ふへからす又
金澤へ程近く旅人ハ即時に攻寄ん事必定也越
前にて大谷と對陣の折から金澤を責られてハ
叶ひ難へからすと本國へ引返され然るに唐しとい
ふ者有りいやして是ハ敵の計策にやあらん信し
かくしとて越前を御平均あるへしといふ者有
て詮議區々なりて三日滞留ある所に利長の伯母
婿中川宗伴より書簡到来し宰相披て見給へハ
武蔵守より状と同し趣也扨ハ疑ふへきに非す宮
の腰へ引違へ寄られてハ叶ふまし先ツ本國へ

引入上方関東の事共を聞合せ又下坂有て出馬
とて細呂木より引返されたり後に聞けハ戸田
武蔵守大谷刑部少輔か謀合にてかく謀りける
と知り此宗伴ハ橘津有馬に被居けるか利長出
勢を聞て北國へ下りけるを大谷刑部少輔敦賀
にて押とめ文章を好みおさへて自筆に認めさ
せけるとかや宗伴ハ其比能書の名を得殊に利
長常に書音をかはし給へて手跡争で見違ふへ
き疑ひなく然き宗伴か自筆なれハ信し玉ふ者理
り也斯て帰陣の詮議あり本の如く小松へ掛り

内務省
内務省
国立公文書館 National Archives of Japan

押通られんに城より出て防き止めん事疑ひなし只道を替て引返されなはいへとも云ふる有りやと最前に城より支ふといへとも打破り押通りなは間路に懸りて出合事は有るへからず只本の如く押引取り然るへしといふもあり又異議述てなかりといへともさるゝ道を替人日を経ては叶ふへからず兎に角小木の如く近き方へ押行へくしと詮議一決して七月九日小松に趣り引返れり士大将奥村河内太田但馬守高橋右近津田遠江山崎長門横山大膳長九郎左衛門物頭等は上坂彦兵衛水越縫殿堀才蔵松平久兵衛安本年人後殿として五千余騎後殿と定めたり先手悉く引取たれとも城より出て防く勢一人もなかりけりされは諸軍今はかうと悦ふ処に後陣の勢小松の後浅井縄手を永々と引連ね行所を城中より見済し門を開きて打て出さらんいふはかり橋まて攻戦ひ互に勝負見えさりしか小松方覚えたる二三間引退き橋の此方にて打合ひおひ引まて引取れる其浅井縄手合戦とて類ひなき事にいひ習はせり九月朔日利長金澤へ帰て閑暇ふに密の

腰へ敵廻るといふ事ハ諸方兄ふき定立也殊更
内府出らるゝと聞えしかハ却ハたまりかね
て大きに悔て此上ハ小松を攻とれとて既に用
意致さる処に尾州清洲より内府の御書来て
丹羽加賀守事ハいつれにも宥め和議調へ急き上
らるへしと御催ありける此時利長ハ三田山に陣
をとられけるか一日も早く出勢有へしとて目附西
尾藤左衛門を小松へ遣ハし和睦をなし九月廿二
日懸橋口にて参會あり人質を取かはし殊に丹
羽よりの人質にハ宰相の舎弟犬千代をば出さる

時に八歳なり長重ハ弟左近長昭時に十六歳な
るを被出ける斯て宰相ハ再び軍兵を引率し打
立んとし給ふ處に舎弟能登侍従利政利長の命
に随ハさる能登に引籠る宰相土方勘左衛門を以様
々諫言せられとも承引なかりけれハ然らハ打捨
おけとて利長ハ越前へ打出らる青木紀伊守ハ
最前使を捧て降を乞けるか如何なる所存にや
又籠城の支度をなしけるを土方勘左衛門向て
色々教訓を折ふし紀伊守重病を受て居られけ
れハ力なく降参しけるか程なく紀伊守病死せ

り子息右衛門佐所領没収せられ青山修理亮ハ
同時に降参しけれとも御免なく終に土佐國へ
領けらる

會津山形取合の事

去るほとに會津中納言景勝卿ハ関東勢を防く
へしとて白川の城に芋河縫殿介を二千騎置加勢と
して金子美濃横田大学目付にハ大道寺平林など
と云物頭其勢三千にて堅めさせ我身ハ八千余
騎を志たかへて長沼へ出て敵を討んと待構へ
たり白川の後詰米澤の城主直江山城を大將に
て二萬余騎既に會津を打立処に内府下野國小
山より引返さるゝと聞て中納言長沼より會津
へ引返して上方の様を聞合せ兼て約諾の如く
上方より攻下り箱根に旗を立るならハ関東へ
打て出んと支度せられしかとも上方の左
右ハ絶てなしまして箱根まて押下りさる沙汰
もなかりけれハいかゝ成る事にやと不審に思ひ
ありける今更事を破むへきにあらされハ先近國
を切り従へ勢ひを付なやとて先ッ彼を退治せ
んとて直江山城を大將として春日右衛門五百騎

上泉主水七百騎大関弥七郎を軍奉行として九
月十三日出羽守義光か家人江口五郎兵衛か旗屋
の城を平攻にせめて乗取五郎兵衛ハ自害せり是
を始めとして山形領の城砦二十ケ所攻落され山
形勢毎度利を失ひしかハ此競を援の為に山形
の城を攻落さんと勇て進む処に上泉主水山形
ハ西南ハ深き沼にて東北ハ平地にて候へとも
人馬のかけひき自由ならん只是より引取然
るへしと申けれハ山城あさ嘲ひ在陣して沼川
をへたてたる軍ハ甚薄しきにやと申けれハ主
水兎角の詞なく赤面して居たりしか傍に立寄
り扨ハ不覚の事を云つるとの武死を致してハ
此恥辱をハ何を以てか雪くへきと歯噛をな
して後悔す最上出羽守ハ素り無勢の上に味方
毎度利を失ひしかハ伯父の伊達陸奥守正宗と
ハ常に不和なりしかとも此事を詫て加勢をそ
乞れける正宗援兵として伊達上野介石川弥兵
衛に三百騎を付てそつかハしけるかゝる所に
由利庄内の者とも八元来會津の麾下なりしか
いくの有る敵ふくの者なれん義光か勢にそ加りける

其上長谷堂ニハ城主志村伊豆守ニ酒延越前氏江九兵衛冨田相模守等を加へて籠置上山ニハ里見民部在城せしかる程ニ九月十五日會津勢山形へ馳向ふ上泉主水鬼越山ニ陣をとり直江山城ハ菅沢山ニ陣を張春日右衛門ハ小山崎を堅めてそ居たりける長谷堂の者共是を見て志村の家人大風右衛門横尾勘解由手勢を率し抜掛して鬼越山の陣へ無法ニ蒐入り杉本木工之介を始め究竟の兵十余輩雑兵三拾余人討取城兵も拾余人討れたり春日右衛門是を聞て五百

余騎長谷堂へ取掛り一揉ニ揉む処を城兵門を閉て矢先火をちらし防きしかハ寄手又若干うたれ引退く城中ニも加勢伊達上野介石川孫平を始め三拾余人討死す同十七日會津勢穂村酒之允篠孫七郎を大将として上山の城へ押寄る中山と上山との間ニ深谿あり城主里見民部此所ニ軍兵七百余人伏置我身ハ途ニ出向ひ蒐つ返しつ相戦ひ漸くニ引退く敵勝ニ乗て責寄る処を伏兵一度ニ起り閧を作つて打て出り前後より挟み立攻しかハ篠穂村をはしめ二百三

十騎討逃散ゝニ成て引キ退く同廿四日山形勢
打て出一日戦ひ暮して既ニ黄昏ニおよひしか
ハ直江下知して勢を引入ける処ニ上泉主水只一
騎敵陣へ蒐入り火をちらして切死す了程死ニ乃
れ行年三十四最前の詞を深くおもひ出んて斯
く討死やなさりけんあハれなりし事共也

村越茂介御使の事

斯て内府江戸へ御帰座ましまし御評定有て井伊
兵部少輔直政本多中務大輔忠勝を御同代として
八月朔日より出勢有り御伴ニ人々ニ者福島
左衛門大夫細川越中守田中兵部少輔父子筒井
伊賀守藤堂佐渡守京極修理亮同二日ニ出立輩
池田三左衛門浅野左京大夫有馬法印父子松下
右兵衛山内對馬守堀尾信濃守戸川肥後守同三
日ニ者蜂須賀長門守生駒讃岐守寺澤志摩守金
森入道父子一柳監物等也一備ニ兩人ハ同附也
添らる其人〃ニハ武藤掃部介津田新十郎澤井
左衛門祖父江法斎入道平井孫次右衛門同兵右
衛門安孫子善十郎生駒隼人森勘解由林藤十郎
小坂助六郎堀田小三郎安井將監吉田平内堀田

将監八島善十郎武藤清兵衛生熊市右衛門能瀬
六左衛門兼松又四郎横井伊織舎弟孫右衛門河
村介左衛門伊丹兵庫頭村越兵庫頭坪内太郎兵
衛同喜太郎同惣兵衛同嘉兵衛同佐次右衛門父
子五人関十兵衛渡部筑後守加藤平内岡田庄五
郎船越五郎右衛門等也惣軍八月十四日尾州清
洲に着く暫く此所に逗留して内府の御出馬を
相待けり斯る処に江戸より村越茂介を御使と
して諸大将へ被仰遣けるハ孰れも在陣苦身と思
召抜此上一働有て味方となるの證據を見せらる

に於てハ不日に御出馬被成候と其二左右有へ
しと仰せ含めらる村越茂助八月十三日の夜江
戸を立て同十九日の朝清洲に到着して先此よ
し両国代に申し聞せけれハ両人申けるハ
此御諚甚然る處のくて諸将の人質大坂に有る
事なれハ御疑ひハさる事なれとも各去皆一和
して無二の氣色に於て也然るに御疑ひの御諚有
る時ハ或ハ隔心を存し又ハ怒氣を挟さむ輩も
有らんか只何となく在陣を痛せり思召し於近
日御出馬成るへしと演説せられるへし構て御

疑ひの御諚ニ被申そ江戸へ帰参ありてハ我〻共
指引ニて如此ニ於ても被申出ありんと委細ニそ申
ける村越許諾して退きけるか熟〻と思ふやうい
やし智恵才覚の入る事なれハ我等如きの麁忽
者をハ差越し玉ひし詮ある如御諚の趣有の儘
ニ申聞せを得共ハ只上意ニ任せんと思ひ定め諸
将ニ向ひて御諚の旨趣一事も残さし有りけれハ
ニそ申ける両目代驚き互ニ目と目を見合せ大
きニ恐れ顔色なれとも流石ハ臆せしさらぬ
躰ニて居たりけり諸将遠慮しける風情ニそ

暫く兎角申也人もなかりけれハ目代ハ手に汗
をにきり息を詰めてそ居たりける時ニ福島左
衛門大夫進ミ出御諚の趣承り至極ニ存我〻
甚覚悟なく只御出馬をのミ申上候段誠ニ軍理
ニ疎き事恥入りて控へ居候へ目の前の敵と一合
戦仕り御目ニかけ候へし此段宜しく被申上候
へと被申しかハ残る人〻も伴の遠慮なく候事
武門の恥辱申も愚ニ候急き一戦をとけ味方の
手證を御目ニ懸御心を安んし奉らんと一同ニ
被申けれハ両目代色を直し大息をそ継れける

茂介も安堵の思ひをなし頓て江戸へそ帰りゆきぬ

新加納合戦の事

其後諸将軍評定ありて先岐阜の城をや攻る犬山をや攻むへきと一決せさる処に左衛門大夫被申けるハ上方勢岐阜近辺に打集り大勢のよし聞に於ハ犬山の城を攻むへしと觸聞を以て岐阜勢手を分て犬山を救ふ為し其時引違へて岐阜へ取懸攻落し給へし岐阜さへ落城せしむるにおいてハ犬山の敵ハ己と退散すへしと存候此儀いかゝと被申けれハ満座尤と同して來ル廿二日犬山を責むへきの間其旨を心得よと陣々へ觸聞を以て岐阜へ此よし聞えけれハ案の如く犬山へ加勢をもつて究竟の兵を数輩引分け犬山へそ差向ける扨又岐阜の軍勢大略減しけるところ同廿日清洲よりハ岐阜表の評議あり先ッ二手に分れて木曽川の上下を渡るへくし先陣本道ハ左衛門大夫上の瀬三左衛門ハ下の瀬とそ定りけるか時ニ三左衛門被申けるハ追手ハ敵城近し搦手ハ其間甚隔てぬれハおさく

の人数に均し輝政上の瀬へ向ひ候へしと被申
ける處ハ左衛門大夫それハ承引候ハね兼てよ
り西則先陣と定め置れ候上ハ御法を背き候ふ
べきとて顔色変じて被申ける中務大輔進て出是
天下の為にして私の軍に非ず自身の功を欲心
に被懸候事池田殿とも覚え候ハぬ事哉左候
ハゝ直政忠勝もおさへ人に均しく搦手へ向ひ候へ
しと被申けれハ兵部少輔本多殿御の如く天下
の為に候人ハ幾度も和順の詮議なりとあり満而
しら候人自身の功を争ふハ匹夫の所存大将達

の心に懸候ふべき處にあらじと依て輝政の被仰
けるハ郷も甚猥れ候ハ其故ハ池田殿ハ池國まで
不知案内の上に川下ハ萩原贅（オコシ）といふ両所の渡
りあり福島殿ハ自國にて候へハ案内者也先陣
の事ハ兼て御定の上ハ誰か奪ひ候へき頼くハ
様て左衛門殿川下へ向ひ本多殿被申し如く
我らも従申候へしと又余儀なく申されける處
ハ左衛門大夫理に服し左候ハゝ御意に随ひ候
へしと依去上の瀬ハ岐阜へ程近く候へハ敵あらそ
出向ひ候へしとさゝけりとて先手を誡て軍をたてし

め諸ふへかゝれ下の瀬ハ二ツの渡りを越左西
美濃へ廻り遥ふ程遠く其間甚遅参せへし西別
笠町へ乱入し火の手を揚ん時其の煙を見て川
を越されよ人構へて軍ハ搦手よりなしめ其人
し必相図の烟を待出其人ゝ被申けれハ三左衛
门心得候とて諾されけるまゝ程ふ西則ふ属
してに萩原贛(ヲコシ)へ向ひける人ゝにハ細川越中守忠
興加藤左馬介嘉明黒田甲斐守長政藤堂佐渡守
高虎京極修理亮高知田中兵部大輔忠政因民部
少輔長顯生駒讃岐守正俊寺澤志摩守廣高蜂須

賀長門守至鎮井伊兵部少輔直政本多中務大輔
忠勝都合其勢一萬六千余騎搦手へそ向きれけ
る輝政の手に属く人ゝにハ浅野左京大夫幸長
山内對馬守一豊堀尾信濃守忠氏有馬法印玄蕃頭
豊氏中村式部少輔名代中村彦右衛門一榮金森
兵部卿法印因子息出雲守可重一柳監物直末松
下右兵衛重綱其外尾張美濃三河駿河の寄合衆
合て一万八千弐百五十余騎上の瀬へそ向ハれ
ける斯て三左衛門ハ八月廿一日のまだ宵より
黒田村の西の堤下ふ詰寄せて相図の煙を待出

より家に山内對馬守ヶ家老野々村右衛門九郎
を呼て被申けるハ明日ハ敵必ず出張すへしさ
からハ一豊一番に川を渡るへしと思ふなり案
内志て川を渡し候ハヽ末代まての恥辱な
り海潜に瀬踏をして帰れと被申けれハ野々村
畏り候と則其夜瀬踏こし案内を見て帰りけ
る岐阜の城にハ此由を聞て居なから敵を引受
んハ武略のたらさる所之とて木造左衛門具康
百々越前佐藤才次郎飯沼十左衛門津田藤左衛
門を武者大将として馬武者六百余騎足軽雑兵

六千余人新加納ニ出張し大将黄門秀信公ハ川
手村焔魔堂ニ陣を居られけり明れハ廿二日卯
の刻より岐阜勢州端に臨こて鬨の聲を揚け鉄
炮を放ち敵家を渡さしとて招きける三左衛門ハ
搦手の焔を待といへともいまた見えされハ終に此
方へも敵出て味方を欺くなれハ猶豫すへきに
あらす速に川を渡して勝負を決すへしと被申
ける迄ハ鉤まへり候と云て敵在山内對馬守一豊
川の案内ハ兼て知りけれハ一番に馬を馭
り入らる家臣野々村右衛門九郎山内掃部岩越

甚左衛門枝野文四郎五藤牛右衛門山縣孫平次
等打入りたれハ是を見て惣軍勢一度に颯と渡
る程に馬筏に流を堰きあけさしもにはやき木
曽川の逆巻く波岸をあかり十方にわかれて渕ハ
却て瀬と成りぬ敵ハ爰を専途と鉄砲雨のこ
とく放し懸たれハ寄手更に事ともせす向ふの
岸に打上り死を一挙の中に軽んせんと勇ミ進
んて攻寄る百々越前木造左衛門をはしめ城兵
爰を破られてハ何所へか引へきと火をちらし
て挑ミ戦ふといへとも流石寄手ハ大勢にて味方

若干討死したれハ斯てハ叶ふまじと焔魔堂を防か
んとして百々木造引返さハ是を見て諸軍勢我先
にと崩れかゝり寄手是に機を得て鬨を作りかけ
追掛たれハ津田彦右衛門逆付敵を切て落し追
掛りて闘ふと後殿して退きにけり其外さらく
天晴勇者の行跡也百々飯沼木造ハ度々敵に當
り川手村に至て見れハはや大将ハ引入り給ふ
に依て力なく爰にて敗軍を集め静に岐阜へ引
取けり

岐阜落城の事

岐阜の城と申ハ東南ハ峯高く聳へて谷嶮しく
深田重々に續きたり北ハ長良川の切岸屏風を
立たるが如しされハ平安の時さへ人馬の通ふ
道なし况や六具を堅めたる武者に於てをや西
に七曲り百曲り水の手とて追手搦手三の道あ
りといへとも山嶮岨なる所九折に道を付ヶ岩
を切て坂とし石を畳みて扉とせりされハ假令
防き戦ふ者なくとも容易く上る事を得ざるべし
况堅固の城地なり山下に広敷有其左右に士町
其次に武家屋舗とて城の麓あり百々木造以下山

下々まて一防きふせくへきとて広敷に集り居
たりけり去る程に福島左衛門大夫正則ハ八月
廿二日卯の刻に清洲を立萩原へ向ふ然に濃州
竹ヶ鼻の城主杉浦五左衛門川端に芝土居を付
柵をふり鉄砲数十挺構へ打出しけるハ左右なく
渡るへきやうなかりける正則僅の敵に向ふて
素人にてもあれ人数を失ふ事無益也とて川下へ廻
り加賀野井村より渡られける杉浦是を見て
頓て竹ヶ鼻へ引入ける正則透さず押寄せて
り本丸ハ杉浦二ノ丸ハ毛利掃部梶川三十郎花

村半左衛門防めかねたりけるが先利梶川は正則か
旧友なりける故は扱ひを入て味方へ招きしかは
敵し難くや思ひけん皆同意しぞ二ノ丸を明て
ぞ渡しけり則本丸を取囲ミ已の刻の始より申
の刻の半迄息をも継ず攻けるか中に杉浦か
郎等三十二騎同し枕に討死し五左衛門は腹掻
切て失にけり斯て搦手の勢は道に遮留さしか
は太郎堤の近邊放火して其夜は本鍋堤に陣を
取てぞ居たりける斯る處に追手の勢新加納稲
葉堂をも打破りけると聞て正則大きに怒り輝
政に出し抜かれける朽惜さよとて申されける
加藤左馬助されは今夜半より打立岐阜へ押詰
め攻破るへし若又追手の勢に先を越れなは引
違へ大垣へ押掛責るへしとて被申けれは何れも
此儀に同し案の木原へ打入て夜を明かさるた
衛門大夫は余りに腹に居兼戌の刻計りに打立
廿三日まだ寅の刻に岐阜の靭屋町口惣門に詰
寄せ夜の明るをぞ待居たる卯の刻に至て東の
方より輝政の先勢押寄る正則是を見て輝政約
を變しけるぞ憎きに追手外勢城の方へ通さま

しられけるとて藪屋町の東足軽町ゟ火を懸焼立
たり折節西風黒煙を吹掛しかバ追手の勢城へ
寄得べき様もなかりし左衛門大夫昨日の返報しけ
りとて笑ひ進ける城中の兵とも山下陣殿に集
り居たりけれハ我も〳〵と打て出火花をちらし
戦ひけりされとも寄手ハ猛勢なれハ城兵終に
打負山上へ引上る津田藤三郎後殿して閑々と
引取ける追すがふて寄手の勢大手七曲へ押
寄けれハ正則嘉明忠興馬を一所に打寄下知せられ
しかハ三将の前の晴レ軍逋レ高名して感賞に

預らんと我先にと勇て進ミぬハ能かりけり城
の方にハ木造百〻津田を始として大岡角助同
角内伊藤長八郎和田孫太夫大野善八郎木田孫
左衛門等爰を破られてハ叶ふまじと馬駈廻し
進退自由に下知しけれハ適レ武功の勇者之と
敵も味方も感じけり斯く両陣命を塵芥に比し
て互に一足も退さりし親討れとも子救ハす主
手負へとも郎従助けもせず手負死人を乗り越えて
戦ひしかハ暫し雌雄ハ見えざりしが寄手雲霞
のごとくなれハ終に押し入七曲をハ破りけり

搦手百曲りへハ京極修理亮高知向ハれける
荒神の峯を上り柴田修理亮の古屋敷へ出達目
口より攻入りけり黄門の舎弟織田左衛門佐秀
則を大将として梶川才次郎入江左近山田又左
衛門なといふ物頭郭を守て防きけり数ヶの戦
ひ暇て山田梶川ハ討死入江左近ハ逐電して変
をも終に破られけり左衛門佐ハ後に降参して
御免を蒙り江戸に住居をしとそ聞えし池田三
左衛門ハ福島か前道を焼立られて大手へ寄る
事叶ハさりけれ共親父入道先年此城に在て家

人々とも皆案内者なれハ猿ヶ水の手へ廻り攻上
る城の廻路武蔵助十郎斎藤斎宮伊達平左衛門
中野作兵衛大岡左馬介織田兵部数しく支て戦ひ
しかとも寄手是非なく攻入追詰逐廻し攻ける
間長梅川へ逃入て死せる者数を志らす一人も
軍りつ尾き武蔵助十郎織田兵部伊達平左衛門
さへ北の峯へ上り山傳ひに行へも志らす落失
せけりいかゝ計りなき事ともなり則池田か勢本
城へ取詰めけり城兵大手櫻の馬場へ出合防き
けるか諸方の寄せ手一ッに成て本丸を百重千

重に取巻鳴りて叫んで攻ければ城の兵盛に討れ落
失て士僅に三十六人加勢の細頭川瀬大西共に
三十八人に撰成にける今は八十梟（ヤタケ）に思召とも
甲斐なまし御降参なへしと家臣共諫めしかは
黄門力及はれ鬼も角も計らひなへしと宣ひけれ
は木造左衛門高櫓に上り大音上ヶ寄手の大将
軍へ申度き事の候と呼はりけれは正則の家人
津井左衛門森勘解由馬驅寄せ何事に候哉木造
されは候中納言不慮に賊徒に與せられ候と
いへとも今先非を悔ミ降参有へきとの事に候

間此旨宜しく賴ミ奉るとて申ける程に正則輝
政へ申入しかは両将喜ひ其意に任せ合戦をやめ
止られけるに痛はしや中納言殿既に城を立出給
ふが手づから筆を取て感状を書當座に在合ひ
者共に是を賜りける誠に若き大将の此降に臨て
かくる御志はさすがの信長公の御孫程有けるよ
と聞人泪を流しけるか廿三日午の刻城を出上加
納の道場へ入て出家し給ふ同日申の刻寄手城
を受取正則輝政より両家の旗を入置されり黄門
は是より正則の麾下尾州智多郡へ送り遣はし

十月廿八日又高野山へ出らせ給ひしが翌年病
死し給ひけり行年廿二歳也中納言殿出陣の時
加納の道場にて和田孫吉を呼て汝ハ急ぎ大
坂へ上りいつかたにもして妻子を連来り我へと宣
ひけれハ和田急ぎ大坂に行御簾中と二歳の御
男子を盗出し供して立退ける處に忽に顕ハれ
追手掛りしかハ叶もなく御簾中をハ刺殺し奉り
我身も頓て自害し果けり御子息をハ弟の和田
大蔵に抱させ忍ひ関東へ下り随分守り立
て度ハ世にあらんとを参らせよと云含めて落しける
る忠義の程こそやさしけれ大蔵甲斐〻しく
東國に落下り人に紛迯しと我子と号て懐の中
にそたてける是ぞ翌年出世給ひて信長公四
代の嫡流絶さりけるこそ有かたけれ迯させても彼
中納言秀信卿今度賊徒にくみせられし其始終
を傳へ聞けハ江戸内大臣家康公東國征伐の為
御下向の時秀信卿も関東へ進發有るへしと則
七月朔日を出陣の日に定て其用意頻り也御身
に當家の風俗奢を本として美麗を好み常に
茶湯詩哥酒色に耽り彼初の物語にも風流に詞

を飾り親友朋友の交りにも諸事の不如意を覆
ひ隠し明日の要用の欠るなれ共献にハ美食珍味
を尽して饗應を武士の本意とし殊更是ハ出陣
の事なれハ具足の毛色太刀の柄差物に至迄人
の目に立様にとへし下部迄も奇麗に物せよと
て旅の調度まて新に取揃ひたる程に支度に日
数を経て日限の朔日もいつしか過て此月半に
用意も大略調ひ先手既に打立処へ石田治部少
輔より甥川瀬左馬介来て大坂よりの奉書を差出
す今度家康謀戦せしむへき旨被仰遣也味方合

力に加はるへき美濃尾張可被宛行旨猶戦功に依
て東海道可被下旨上意ありて其心得簡要たるへく六
月廿八日毛利中納言輝元増田右衛門尉長盛大
谷刑部少輔吉継長束大蔵少輔正家岐阜中納言
殿へとて書されたる秀信卿熟覧して披見有て木造
左衛門百々越前飯沼十左衛門武藤介十郎斎藤
府宮安達中務等を召寄せ此儀いかにと各所存
異見をとて問ハれけるに然るへしとも或ハ他に譲て口
を閉或ハ己を顧て詞を出さゝる処に木造左衛
門進み出退て思案を廻らし給ふに御家の大事此

一事ニ候処此度ハ評議を凝され候へし是より
御返答可有よし被仰先使をハ返され候へ今一
定の御返答ハ願ふ薄忽に覚え候但御當家ハ大
臣殿と御先代より今に至く深厚の御因ミ候へ
ハ安否を共にし被成候事理の当然に候殊更此期
に及く約束を変ぜられん事尤武士の本意に候
ハず況や両國を餌にして約する如きをや
次に内府誅伐の事幼君の上意信じ難く奉行の
私とても存知候へ其上合戦に及ぐハ内府の勝
利を得られん事眼前也兎に角御思案御評定候

へし先使をハ返され既に一ト先申され候ハ一
座此儀に因して相談ハ先此ふなり爰に入江左
近保遠平左衛門高橋一徳斎とて辯舌義の曲
者有彼等三人ハ日夜黄門の膝本をさらず万事
相談の相手なりけるか偸かに彼等を召て家老
共の評議の趣汝等如何思ふやと尋られハ左近
長くこ出申けるハ家老共の経議一ツとして心
得候ハず先是より御返答候へしとく御使を被
帰候事御因心なきに拵て然るべく候哉又御
因心に候ハヽ即答在成候て了拵大坂へ可被怪候

に於て是一ッ御當家御代々内府を以国被成
所今変せらるゝハ本意に非ざる事如何とならハ
んや過つてハ改るに憚る事なかれと見えたれハ
内府積悪顕はるゝ上ハ是を避け遠のかる事
理の當然なり何ぞ不義ならん是二ッ應ずるの大
名違判を見なから幼君の奉書を疑ふハ己に傷
あれハ人を疑ふに似たり執り用ゐるへからず
次是三ッ美濃尾張の両国を宛行事是を餌にし
て此方を釣るとの申事不審に於てそれ武士の軍功
を励むハ身死して名を残さん為のミに非ず家

興隆せん事を思ふか故也然れハ両國を御拝賜
あらハ御家の吉慶興起の始め也是四ッ合戦に
及ふハ内府勝利なるへしとの申事是又不審なり
されハ勢州より西諸國一圓に蜂起せしに奥
に上杉佐竹相馬岩城等の大敵を受て四ッの所る
神通の家康なりとも運を開かるへく候ハんや
何を見付て内府勝利とハ申候らん是五ッ彼と
申是とて大坂へ與こし被成事簡要にて候趣ハ早
速御返答被成て下地奉行中も疑ひなき味方に
思ひ入候ても只今夜中返事を被遣趣るへ

らはと三人一同に申けれハ中納言秀信もさこそ
と思へとて機嫌不斜おして自筆に返簡を調へ左
馬介に渡し引出物賜りけれハ川瀬悦ひ其夜明
ぬうちて大坂へ帰り上りけり翌日家老をあつめ
家中の面々不残呼集め中納言殿此よしを宣ひ
けれハ何れも驚き興を醒して帰りけり黄門述
も一味なる上ハとて頓て佐和山へ立越軍の圖
をきも合ハされける百々越前木造左衛門ハ一所
に集り評しけるハ是偏三人の侫人の為に如當
家滅亡の近きに在りて我等つまぎ御家の指列ハ城

之助殿御遠言ありて徳善院執し被申事なれハあ
るまじ遠ハ法印へ申して了きとて両人思ひ立て大
坂へぞ出立ける大坂に至り法印に参り始終を
申しけれハ法印以ての外氣色を損じ信長公家
康公誓盟を以堅く被仰合家の安否を共にし孫
に至るまで凡諸人の知る所也然るに今秀信御先祖
の掟を違へ孫にして家運忽ちに尽て滅亡の後永く
悪名を謂孫にへし内府と共に謀戮を受て先祖
への奉公にし孫へと汝等早く帰て此旨真直に
申含めてと被返ける両人されハ了ほとて急ぎ

帰て此旨を一〻に申けれとも更に承引ましま
さゞる時に坂沼十左衛門申けるハ今に至て術を
変改も被成難かるへし近日三成是へ被参と聞
えたり得ハ願ハ幸の幸也彼を討取関東への忠
節に被成候へ討手ハ某に被仰付候得と申けれ
とも黄門許容し給ハねハ家老共さま〳〵諫むれと
も聞入給ハさりけれハ何れも腹を立此上ハ尸
を一つ所に晒さんより外ハあらしとそつふやきける
是より家中別〳〵に成て軍の評議一決せされハ只三
人の佞人のミ日〳〵に出仕して大分の金銀をとこ

らを牢人溢者を召集めけるほとに人数ハ城に
充ち満ちけれとも事の用に立へきとハ見えさ
りけれハ左衛門申けるハ兎角此方一味の議定の
上ハ清洲の城を攻め取給へし正則出陣の跡な
れハ近里といひ幸の時節也とて則人して大坂
へ此旨をそ達しける治部少輔申けるハ正則ハ
故殿下の御親族也年来の秀頼公を見放すへき
殊更人質大坂に有今見給へ帰来り味方に参ら
んするそ然らハ清洲を攻取らんハ敵に仕なし
とのあまり深く無用也とて同意せし誠に愚者の

智ゟ智ニ似て愚也智者の智ハ愚ニ似て智也と
云事今更おもひあたされたりよしなき心頼ニ
て天下の大事を失ひたるもさるものなり事
共也未造大きに立腹して其後ハ軍評定ニも出
ず寄合ニて軍法を評されたる事行へきとも見
えさりたるに合戦ニ及ひてハ一日も堪へず新加
納の軍敗れしかハ上下気を失ひ翌日乃軍半ハ
ニ武藤弥十郎斎藤高宮入江左近入より先ニ落
失せ城ハ雑なく落されぬ利口の邦家を覆す事
今ハなしめんといひあへりし浅ましかりける事

甚なり

瑞龍（寺）山稲葉山砦落去の事

岐阜山と谷を隔てて瑞龍山稲葉山とて二ヶ
所ニ砦を構へたり瑞竜山（寺）ハ柏原彦右衛門同平
助是を守り稲葉山をハ松田十右衛門籠り居たり
岐阜寄手の勢手を分て二ヶ所の砦へ馳向ひたり
瑞龍山（寺）へハ浅野左京大夫幸長是非なく攻よせ
喚き叫て攻掛る浅野甚市郎一番登と名乗て先
先ニ塀をのる是を城兵見て我も〳〵と蒐寄たる所ニ
林九右衛門中にたるハ塀を登るハいとやすかれ

これ只一人の働にして大功にあり故諸軍の為
にいざ此城戸を破らんとてまき門の横手に太
刀を以切目を付力に任せて押けるを諸軍是を
見てさも也とて我も〳〵と立寄り曳や〳〵と押けると
に雑兵共城戸を押して破り大勢咄と押入りしに
ハ城の主人柏原叶はじとや思ひけん槍取て蒐
出向に者を突伏せあまりを拂て扣より佐々忠
右衛門か若黨杉澤源丞と云者刀を以出向ひ人
交もせず相戦ひ暫く勝負見へたりしが終に柏
原を討留め首を取て帰り大将幸長の前に出て

城の大将柏原が首にて候と云左京大夫忠右衛
門が高声のとて聞出けれハいや某討候とて参入
ける幸長聲を励まし死首を取て来るあるへし
と大きに怒り玉ひけりされハ後迄も杉澤が功
顕ハれ其成にけり主人の功にあらしかりせハい
かによのつねへきことの武士とさきその心得あき
事なり此大将既に討此ハ残る兵ども或ハ
討死し又ハ落失ける程に雑兵共城を乗取けり
稲葉山へハ井伊兵部少輔直政責寄せ打破り搦
手にて攻ける此ハ廿三日巳ノ刻岐阜と同日に二

ツの砦落ぬれハ犬山へハ中村式部少輔一氏陣
代中村彦右衛門をおさへとして指向らる羽黒
より城邊近く押寄るといへとも城主石川備前
守堅く守て加合ハ寄手も又軍をやめ押詰對陣
して居たりける此城加勢の面々もおもてへ出ハ
心ありけれハ見合てける也

土左物語巻第二十五終

土左物語巻第二十六

目次

河戸合戦の事
關東勢赤坂宿陣の事
内府江戸御出馬の事
杭瀬川合戦の事
筑前中納言の事
宮部兵部少輔回忠の事

土左物語巻第二十六

河戸合戦の事

福島左衛門大夫正則八月廿二日此夜また宵よ
り太郎堤を打立て岐阜へ向はれけるか寄手の
人々皆遅滞して岐阜の城攻にも遅れけれはこ
はいかゝせんと身を揉て評議有か後左馬助進
み出て岐阜の城に限るへき敵にもあらす何れへ
も敵に逢ふてこそ簡要なれいさ大垣(オホカキ)へ押寄攻
取へしと被申けれは孰も此儀尤もとて黒田甲
斐守長政藤堂佐渡守高虎田中兵部大輔忠政生駒

讃岐守西俊寺津志摩守廣高蜂須賀長門守至鎮
此人々を始として我先にと押向ふ大垣まで思
ひけるに敵岐阜を攻ると聞えけれバ後巻し
て一戦に勝負を決せんと先陣にハ石田後陣ハ
小西福原と相定め勇み進んで押寄る三成か魁
首前野兵庫ハ石田に十五町先達て呂久を越え
河戸の近辺にて軍勢揃へ躰を竹葉をつゝひた
り兵庫か手のもの森九兵衛杉江勘兵衛真先に
進みて河戸の川端に至る所に東國勢大垣より敵
出ると聞てさし向てハ変あらんと待へしとて河戸の
堤下に旗を伏せて待居たり森杉江ハ川端に臨
み何所をか渡るべきと伺ひけるに向ふを屹度見
て敵是まで来れりと知てけれバ此よし兵庫方
へ申遣しけるに敵ハ岐阜を攻て軍の最中なる
に何者か只今寄来へきと騒く者ハなか
りけり森杉江ハ川端に足軽出して敵渡らハ
防くへしと構へける田中兵部大輔か家臣坂本
和泉か下部三郎右衛門と云ものの生国ハ三州吉
良の者也名誉の水練なれハ瀬踏せられんとて来
拝を振て馬を颯と打入られしかハ諸軍我先に

しと乗込んで渡しけり森杉江ハ弓鉄炮を隙な
く打懸け寄を専途と防き戦ふ三郎右衛門ハ氷
中を平地の如く往来して渡渉ふ可を立賊り杉
の味方を招きけり森杉江是を見て小賢き奴哉
誰かある討取れかしといひけれハ武者一
騎馬蒐かし川へ颯と馭入レ三郎右衛門ニ切て
掛る三郎右衛門刀を以馬の両足を薙けれハ真
逆さまに落る処を起しもさて氷の中ニて首
取てぞ差上ける忠政士卒ニ先達て渡られけれ
ハ此有様を見て続て乗寄せいりし人々往けり

其鎧を剥て着せけれと宮ふ三郎右衛門申けるハ
具足を着替て何名字の好き下郎ニさせなと答へ
ければハ兵部右補則河戸を名字ニせよと被申け
れハ三郎右衛門畏りけて具足を剥取て着し真
先ニそ進ミける夫れより彼者を河戸三郎右衛
門と称せける田中か渡を見て諸軍一同ふ皆
打入て渡しけり前野兵庫か先手の兵敵大勢川
を渡しけるとて崩掛るに寄手進ミ兼て陶を
作り掛り鉄炮を打掛け弓を射懸動揺して競来
る兵庫ハ最前より寛々として居られけれハ軍

兵皆驚き騒き一支へさゝへんともせず崩立て
逃帰る恥有る勇士とも八取て返し高名せるも
有討死せしも多かりける杉江勘兵衛ハ田中を
見て兵部殿槍合せんと莵寄るを忠政の家人
西村五右衛門立出て突合ひ終ニ杉江を槍付け
るを杉原善右衛門十八歳莵寄て首を取兵庫か
勢の中より浅田但馬高山平右衛門三成か前に
かけ来て申けるハ岐阜にてや攻落されさると
見えけれハ此河勢ニて勝誇つたる大勢とおち合んとて
る事叶ましく思ひもよらず候ハ先大垣へ御引取有て
重て御合戦有べしといふにも果ぬに三成の陣騒き
立て裏崩れせる程に三成ハ大垣さして引て入
る小西島津ハ流石のものなりといへともハ逃る
味方に引立られて大垣へとて引にける

関東勢赤坂宿陣の事

さる程に東国勢道々宿々放火して東海道を真
直にみしりの逗留にて赤坂の宿に着て虚空蔵
山におし上り宿陣を取て人馬の息をそ休めける
三成か家老島左近敵宿陣の躰を見て三成か陣
に行て申けるハ敵赤坂に陣取候今夜押寄ておち

落されけれハ此間の軍ニ労れし士卒も大将も物の
用ニ立へからす討取候へしと申けれ
ハ治部少も尤然るへしとて左近を小西と嶋津
か方へ遣し此旨を達せしむれハ味方の軍
勢皆聴して衆議調へけるハ先一両日も敗氣を
直してこそ一圓ニ進ミ得ると左近腹を立迸
とも同意なけれハ力及ハす斯る所ニ廿三日比
晩景宇喜多中納言秀家卿太鼓の丸の旗を指せ
大軍右田より着陣し玉へり味方是ニ力を得て
今ハ何事か有へきとて諸軍悦ひ勇ミけり中納
言治部少ニ宣ひけるハ軍ハ今夜を過すへからす
治定て其功得まくそ候らん秀家荒手なれハ
先を仕るへきと宣へハ治部少卿も尤然るへう
候とて嶋津小西か方へ行て評せられとも同意せ
されハせん方なく帰来り又中納言の陣へ行今
夜の軍の事攝津守ニも兵庫入道ニも談し候得
とも両人同心なく候三成も彼等同意ニ候ハす今
夜ハ思召止まらせ給へ一両日の中ニ伊勢口へ廻
り候味方大勢来着候へしさらハ手も碎のに
して追落すへき事案の内也今夜取懸らんハ卒

申すやう島津小西ハ申けるを被申けれハ黄門
いやいや左様にてハなし秀家今日左田より僅ニ
七里を来りけれハさや人馬共ニ然ハ疲れて候敵
ハ一昨日より歩行にのミ駆り岐阜河戸の合戦
して今夜あの山ニ上り陣取候へハ兵皆疲果
て中々働く事思ひもよらす只勝へき図を外ニ事
無念の事也小西島津同心なく候ハゝ御邊諫を
請られ候へ秀家先をうけ候へし治部少敵の疲
れハさる事にて候へとも先陣進ハ足入の沼多く
して莵角不自由也縦令今夜よせるとも其道不
案内なけれハ松明候ハてハ叶ふへからす又火を
立候ハゝ敵是を知て謀無ニ成り候ハん又兎角
して道ニ迷ひ時移りなハ夜も明候へし山ハ然
り白昼ニ軍をハ城を攻るニ均しかるへし敵ハ
四万ニ及ふ大勢ニ候御人数と三成か勢と合せ
ても二萬ニも足らさる程なり半分の勢ニて十
死一生の軍の如く夜中ニ不知案内なる悪地を
火もなくしてハいかてか押行候へき一両日の
程ニハ毛利長束大勢ニて参るへし三成か人数
も無事なるへきなれハ大軍を以速ニ退散らして

渉同ニ掛なへしと被申けれハ中納言十四度ニ
長途を渡らハ討つ屠りとも今於時ニ能く叶ひ
なとのを斯く能き図を外ッし後悔有へきと宣
へしも治部少同意せん又三成か杉明なくして
行られましといふニ秀家もあぐミて思ひけれ共
逆ハちからなく此事止ミニなりぬハ天の此ヶ里
なる事共也去ル天正十八年ニ秀吉公小田原を
攻玉ふ時往昔九郎義経の三草山を誠られしを
や思ひ出られけん二子山ニ火を付け其光ニて
夜中ニ城を廻りて石垣山ニ上り勝利を得られし

しをハ三成ハ正しく見とりし事ならずとこの
ハ思ひ出さらん歟又夜明ならハ朝霧の紛ニ
ニ不意ニ押寄せんニ何ぞ勝利を得さらん後ニ
聞けハ東国勢ハ遠路を凌き数ヶ度の戦ひニ人
馬皆疲れ其上敵より寄へきとも思ひかけさりし
れハ馬の鞍をとり鎧太刀刀をもぬき置帯紐解
き前後も知らず寝入てさながら死人の如く有りし
とのや又三成か敵兵四萬を積りしも相違せり
岐阜の寄手ハ翌廿四日巳ノ刻ニ至てかしこニ
来り集りけれ今夜ハ河戸の軍志たる勢僅ニ一

萬余騎にて陣取けるに押寄せたりせハ忽ちに追
ひ落さん事十にして九ツ也其夜此敵を討取な
ハ西國大城ゟ競ひ滅して後の勝利の本なるへき
に斯くよき図を外し事愚将の習ひとハ云なか
ら兎にも角にも三成か運の盡ける所也

内府江戸御出馬の事

八月廿六日諸将より注進の使者江戸へ到着
して岐阜の城を攻落し討捕る所の首を差上
けるか首四百三拾福島左衛門大夫四百九十池田
三左衛門三百八浅野左京大夫二百五十山内対
馬守弐百四十堀尾信濃守此首とも桶百弐十ニ
入て差上る家康公則御實検有て後彼首を八麻
布の原ニ塚を築かせられ増上寺の源誉上人西
蔵院忠義法印読経焼香仕るへきよし被仰付け
り去程ニ内大臣家康公御出馬有へしとて江戸
御城本丸御留守居御舎弟松平因幡守康元石川
日向守家成西の丸ハ武田万千代信吉松平源七
郎康忠其外都合二萬余人残し置れ御供の軍勢
三萬二千七百三十八人九月朔日江戸御立有て同
十四日午の刻ニ岡山ニ御着陣也御陣城を八薦

て山上に構へらる北の手ハ加藤左馬助金森法
印黒田甲斐守藤堂佐渡守筒井伊賀守益(マス)井村に
ハ細川越中守同村東の大塚にハ福島左衛門大
夫御陣城北の手にハ井伊兵部少輔本多中務大
輔京極修理亮西牧野にハ堀尾信濃守山内対馬
守浅野左京大夫荒尾村にハ池田三左衛門同備
中守長松村にハ一柳監物味方を廿余町離れて
也とも是ハ若大垣より敵寄せハ直に一支へ防
くへきと也東牧野にハ中村彦右衛門有馬玄蕃
頭様迄にハ田中兵部少輔岡山の艮の方にハ内

府の三男下野守忠吉擬して岡山の東西南北三十
余町の間にハ軍勢の宿らぬ處もあらさりけり堂
々の陣を取て山上を守護し奉る合戦毎勝利の
後此山の名を勝山と改らる往昔四十代の帝清
見原の天皇大伴の皇子と戦ハれさせ給ひ吉野
山より伊勢路を通り此国に御下向ありて當山に
御陣を居られ関ヶ原へ御出不破にて御合戦有
りしに天皇御勝利のことありて洗撮没討迚させ給
ひし程に再ひ此処へ御陣あり其時杭瀬川に
て天皇矢疵を洗ひ給ひされより苦醫瀬川と書

勢ら那しとかやケ様の例を思召出られて今此
山の岳を攻め給ひけん甚後大坂御陣の時ハ先
例吉慶の靈なれハとて將軍此勝山にて夜御陣
を居られけるとなり

杭瀬川合戦の事

大垣にてハ諸將評議しけるハ須日関ケ原の合戦
最中なるへし殊に佐竹真田會津の三方を敵に
請てハいかなる家康なりとも容易に上る事ハ
思ひ絶ぬる間近る大坂の敵を追落し押て東國
へ下るへしと諸方の手を合せけるか知る九月十
四日内府着陣ありて岡山の陣中にてみ合へ
り實ハ此一両日前より東國勢陣替せる躰なれハ
いかなる事とて大垣の上下に会へりしに内府
着陣疑ひなかりけれハ諸人案に相違して定て
関東を治めてこそハ上られけめとて大垣の
御天斜ありて諸將蒐廻り静り兼へと様く下知
せられしも陣中色めき立て騒く事たえさりし三
成り家老島左近治部少に申けるハ此儀にてハ
味方の騒動聞ゆるへしからハ某人数を率し出張
し一合戦仕り敵の様を見て計ひ候へし跡にて御

組有之陣中を御静め候へとて左近ハ稲葉兵部
林半助伊藤頼母水野庄次郎等と一番よ打て出
る蒲生備中二陣よ続て宇喜多中納言秀家卿ハ
人数を西ゟ人出されけり左近ハ池尻口より出
て兵を分け木戸一色よ伏兵を置て杭瀬川を渡
り敵陣近く押寄せ鉄砲を打かけゝり此時東國
勢ハ内府御着陣よ随て勇み誇りけれとも御下
知なかりけれハ出逢ふものなかりけるを所ハ中
村彦右衛門一栄の手より敵を小勢と見侮て打
て出家苑野一色頼母藪内迄溝口源右衛門等真
先よ進ミて蒐向ふ左近ハ元来巧之事なれハ
弱として應答て引退く寄手勝よ乗て何所迄もと
追掛る程よ川を渡り笠縫堤迄逐懸る藪内迄ハ
川の此方よ私人組のものと城出め置頼母ら
方へ使を以云ける長追ひハ無用也早く追捨
て引返されよ人々敵若慕ひ候とも其是よりて請取
るへき間諸引とゝまり候へと言遣ハし候處野一色返
事よ某儀ハ思ひもよらぬ味方下知を聞入迄
候心なし候足跡なしとて進ミて行く敵ハ思ふ
圖よ引付て木戸一色の藪よ伏置さる兵鉄砲よ

て押立しかハ寄手案に相違して大に崩迯て迯
帰る頼母ハされハこそとて采拜を取て人数を
引纏ひ鉾場にて勝負せんとて引返しし此邊ハ足
入にて地形悪しかりけれハ野一色深田に馬を
入進退自由ならさる所に馬を取て引出さんとせる処を
秀家の士浅香三左衛門と云もの走寄て頼母
か綿上を取て引下し田の畝に押伏せ首を取て
そ立上りける是を初めとして中村の究竟の者
共三十六人討れて崩れけるを西国勢続て追掛
しかハ溝口源右衛門沼本右衛門等暫防て味方

をそ引取ける有馬玄蕃頭豊氏是を見て縦令台
命なき迚も目の前に味方を若干討せてハ争て
か見物しへき迚とて真先にすゝみて川を渡つて
突掛る西尾豊後守福島左衛門大夫浅野左京大
夫も続て懸りしかハ西方より島津兵庫入道小
西摂津守其外石田か手の者とも左近を討さ
しと一度に咄と懸る島津ハ西尾と相戦ひ
小西ハ福島浅野と相戦ふ有馬玄蕃頭ハ左近を
中に取込め互に命を惜まん拘に揉て攻戦ひ左
近か方にも味方次第に加り大勢に成て敵味方

入乱レ討ツ討レツ揉ミ合ケリ有馬カ士葉瀬左
大夫上田半平岡清三郎浅野彦右衛門土方六左衛
門池田奴平稲次右近十六歳衆ニ抜テ高名シテ
リ大垣方ニテハ三成カ家老島左近蒲生備中宇喜
田の家人明石掃部長船善右衛門本多三弥等高名
シテ西国方ヘ首数弐百四十六討取治部少輔実検
シテ首の色悪シキトテ深ク心ニ掛ケルトソ
聞ヘシ軍ハ皆大垣の方勝利ニテ敵多ク討取ケ
レトモ芝居ヲ蹴ヘモ懸ズ引テ帰リシ也相ル今
日左近出張シケル故ニ大垣の陣中静リケリ又

笠縫ニテの左近カ合戦の様ハいとかしかしと
味方挙テ褒テケリ也

一、筑前中納言の事

斯テ所ニ大谷刑部少輔ヨリ戸田武蔵守ヲ使ト
シテ大垣の諸将ヘ被申ケルハ金吾中納言殿の
事此間陣中ニテ沙汰の通リ何共不審敷野風ニ
リ此儀能々御相談有ヘシト也申ケル是ニ依
テ両三会合シテ評定アリ治部少輔被申ケルハ三
成方ヘモ此事別ニ告知モ有ル所以ての外ナル謀
ト見ル所也いんとして滝川豊前守矢田半右衛門両使

右以秀秋卿へ一通の書を遣し其詞に云く

一 秀頼公十五歳に被為成候迄ハ関白職を秀
秋卿へ可譲渡の事

一 上方の為御賄播磨國一圓に可相渡事

一 於江州十万石并於同州稲葉佐渡守平岡石
見守両人に十万石宛従 秀頼公可被下之
事

一 於當坐為御音物金子三百枚并稲葉平岡に
も金子二百枚宛可被下之事

右條々於相違者泰哉

上者梵天帝釋四大天王廿八宿下者堅牢
地神地之三十六禽日本六十余州大小神
祇別而春日大明神八幡大菩薩部類眷屬
神罰冥罰可罷蒙者也仍起請文如件

九月十四日 安國寺

刑部少輔

治部少輔

大藏大輔

攝津守

秀秋卿

黄門是を披見し両使に向て被申けるハ事新し
く條数つゝとして更ニ心得ぬ秀秋始めより秀
頼公の味方として其心変せぬ證なれバ今此属託
ハ何事ぞや秀秋頻りに本意を失ふものか若反逆
を存せバ斯る小事に心を奪ハれ天下の大事を
捨べきや是一ッ其上天下の政務を秀秋に可被
譲との箇條第一と書れしより此事先以信服せぬ
既に今度輝元卿をして大老の上座ならしめ大
坂西の丸に移して内府の跡をさゝへさするや然るを
何の過失有てか毛利の政務を放し秀秋に渡
されん其謂なし是二ッ毛利家の寵を今異変
あるハ当家に職を争ひ天下の乱と成るべし何
外の道にも此條数吾に於て本意に非ず是三ッ
秀秋味方に有て如此諸人の疑ひを請んよりハ
速に兵を引て本国に帰り證者の実否を糺し申
さべしとて披見ありし状へと返事して彼檄
をハ両使へ被返され矢田滝川帰て此由を申れ
しハ諸将いよ〳〵安心もならず戸田武蔵守
重忠申けるハ秀秋の別心においてハ疑ひなく
候間今夜重忠彼陣へ参り軍評定に事よせ刺遂

い致へし何方にても命を捨る御奉公にて候
間御免候へと申候迄ハ座中の面々是を聞て適
無類の勇士哉と大に感して暫く兎角申者もの
もなし良有て治部少輔申けるハ唯今武州の被
申所ハ秀頼公の御為海山とも申尽し難かるへ
し御忠節の程感し入候乍去夫迄にハ及ひ候ま
し秀秋も何んといへハとて慥なる興證も候とも
殊に味方より敵内通の者を拵へ入置候へハ
自然秀秋返り忠なりとも此方へ返り忠の者敵
の中にて裏切致し然れハ是非角なり中納言

若又別心なき時ハ大きなる味方の損なり構て
卒忽の働き有へからす候とて武州をハとゝめ
けり重正ハ三成ハ元来茶の湯の友にて其中ハ
よく懇也殊ニ武州ハ今於[illegible]忠有て勇なれハ忽ち
哀の情起りて目前ニ武蔵守を失ハん事残惜さ
て止めけるとそ聞えし扨も彼筑前中納言秀秋
卿ハ二心を抱き諸人の疑ひを請なから西國方
ニ有て終ニ關東へ忠義をなしきまふいかなる
人にてハ座さへハ斯る不思議を行ひ給ふらんと
其謂れを委しく尋ね聞けハ故太閤未タ木下藤

吉郎と申せし時杉原道松の第二の娘を浅野又
右衛門養子として前田又左衛門媒にて藤吉郎
浅野が家へ入聟に成給ふ後に秀吉公は最愛の
婦人数多おはしましけれども是御本妻なれば
とて北の政所と申けるされどもこれ実子のなき事
を歎き給ひ或時殿下へ申させ給ひけるは自君
の御威光に依て日本の諸士にも敬はれて何の不足
もなけれども子を持ざれば後世を永く
弔はさるゝ余りに深く覚へて候然れば自
らの兄木下法印子共数多持て候へばいづれに

てなれ一人養子に給はり度と申させ給へば太閤関
白元の事なれば殿下の養子なれば我為にも子
なるの間器量よからん者を撰ひ玉へ法印が子
共の中にも四男辰之助こそ聡明なれとて政所
の御養子に相定められ常に傍にさし置れて
り中納言秀秋是也爰に小早川左衛門督隆景は
一生不犯の人にて実子なければ熟して案して我
領せる筑前の事は太閤より恩賞に賜りたれば
死後に返し奉る事勿論也但し太閤の被下度と
思召人を養子て国を譲らば公私の為然るべしと

思惟してこの秀秋を家督に申請度よしをきこえ
ければ殿下嘉して秀秋大名に被成べき果報之
ところ則隆景預りに任せ養子にぞ被下ける左衛
門督卒去の後筑前の國を領し従二位の中納言
に昇進して一家の繁昌双ひ无し此時中納言数
多ありしかハ此黄門をハ左衛門督の跡と云心
にて時の人金吾中納言とぞ申ける此人壮盛の
後強盛驕慢にして萬我意に任せて行跡濫れけり
家臣村山越中深く是を歎き常に諫言を加へけれ
ハ秀秋立腹して村山を国より放てぞ被捨ける

太閤此よしを聞し召大きに怒らせ給ひけるハ隆景
より候人ながら長臣を継へ科有者も一應ハ柔和
の沙汰に及ふへし況や是ハ忠のミ有て不義なき
し輩に彼を誅して己が悪行を人に譲る事是
非に及ハれ中々大國を治る器にあらざれハとて筑
前をハ被召上越前の内にて北の庄十六万石を
ぞ賜ひける老臣山口玄蕃にハ加州大聖寺を六
万石下され北の庄の仕置口入すへし但し秀秋
を主人とハ思ふへからず中納言も又玄蕃父子を
只今迄の如く家臣と思ふへからすと堅く被仰

付けり是迄ハ淀殿と秀秋其中よりつてハ様々ニ
へ移ふ故とて関ニ有し玄蕃頭やうく西國より大
聖寺へ入部しけれとも秀秋卿ハ減少して北國
へ移らん事を大きに悔て入部せし旧領ニ目を
送らる政府大きに悲しミ思ひ一向内府へ付託
ニ有けれハ内府職ニ痛ましき事也とて太閤
の御前ニ出黄門近年の行跡不義不法の至り免
角申上るニ詞なく跪りつゝ人共是迄生得の妄
思ニ従ハれ若輩血氣の致せし処なりて候此以後ハ
國の仕置諸事差引ハ惣て家康口入致へし政所

致し不敬き致ハの理ニ過て覚なく候間哀御赦免
有て旧國ニ其儘安堵被仰付候へと詞を尽し淀
殿詫ひられハ太閤の流石黙止かたくや思召れん
彼を免し置ん事國政の私也とて人ともの家康ニ
對し赦免せしめ旧領ニさし置也後来不義ありて
ハ秀吉ニ談ずるニ及ハれ家康押へて誅伐致へく
しとぞ仰られ去りて程なく秀秋旧領ニ安堵し玉ふ
事併家康公の厚恩なれハ生て世々忘るへからす
れと政所旦夕ニ申されを詫ひ秀秋の深意ニ思ひ
入迄けるなれ此度の関東へ與せし詫ひし也云

扨此伏見の城攻の時三本木の御所へ参り給ひ
て此事を請させられしものハ政所殿の事只一重に
被思定まれ共今敵の色を立んハ卒忽なり何とも
なく三成長盛等の申に任せ伏見へ向ハれ給へ
彼城にも少将籠られれハ折を伺ひ内通して頓て
入城致されよ其時自ら大坂へ行て輝元を様々
賺のし和議を扱ふへし吾も太閤の政所といはれ
れて實母ならずといへとも秀頼の母堂の名あ
れハよも違背ハなすまじき也兎角して日数を送
らハ内府も登り給ふへし其時にこそ　ひのなる

方便も有度きなれと宣ひ含させられ秀秋伏見へ
向ハ逃れざる處に少将ハ天性臆病にて城を出奔
せられしかハ秀秋兼ての内請相違せり政所聞
しめし少将ハさりとハ不覚者にて有けるよ聞も
中々再謁ハしとて再對面なかりけるとぞ聞
えしそれより少将ハ遁世して後に東山長嘯とも
そ申しける武士にて指てハ取所なりしといへとも
歌道にハ定家の再来といはれしほとの達人な
れハ世人深くもてなしける也斯て秀秋伏見に
至て入城あるへきよし再往被申入といへとも鳥

居等許容なさゞりければ中納言力及ばず聖目城
へ兵を寄せられけるに時に三成八幡より軍中に来
りけるが秀秋に向つて大手を強く攻られよとし
下知しければ其射甚だ法に誠ならずけり黄門嫌く宜
ひけるは三成が奢侈充尾範也今敵の城を目前
に置きながら如斯吾に不權を逞ふ内府若し亡な
ハ我らを只家人の如く應答せんとす何ぞ三成を
尊崇せんやされども思ふ子細ありとて色にも見
出さずして時至れハ三成長盛等思ひ見より
伏居たりける程に東國へ討手の勢七月末
より漸々に打立ちけれども秀秋伏見の軍に手負多
く勢も疲労を加へたる也其上兵具悉く損じければ
修補なさんが為とて又國許の人数を呼出さんとて
日数を送りけるが程に出勢延引不可然と長盛度
々催促しけれども兎や角と緩らかしけるが間に
とかく九月にも成りしかバさのみにハ如何なり
とて一萬五千の軍兵を率して大坂を打立殊に
り家人神木清兵衛齋藤与右衛門を使として黒
田甲斐守方へ進らせし最前より申出る通り今以
相違無之旨を平岡石見が弟平岡出羽を人質に

内務省

進せらる石見ハ黒田如水入道か嫡子なる故に
甲斐守を頼ミける也内府御感有て鳥居ニ注進
ル無異儀達しける重て軍の手合を致さるへし
と委細ニ御意有て人質をハ留め置れ両使ニ御
暇を給ハりける中納言ハ江州石部勢州関地蔵
あたりニ数日逗留して閑より日野越知川へ出柏
原ニ陣して御座ける処ニ両使帰り来て内府の
御返答を申けれハ黄門悦ひ九月十四日濃州松
尾山の城へ乞被入ける脇坂中務大輔小川土佐
守朽木河内守ハ同しく松尾の山下ニ陣取ける

り此三人ハ藤堂佐渡守を頼ミ味方ニ可参よし
堅く申上ける間合戦の最中ニ裏切すへしとて
御意有ける大谷石田等ハ黄門の事をハ粗心付ける
なれとも此三人の心中をハ夢にも知らさりける
宰相秀元吉川大蔵ハ内府へ内通せられける迄ハ
大垣方の軍議いしたの如くに覚なき添

宮部兵部少輔回り忠の事

相ハ金吾中納言西国方ニ有なから関東へ内通
あるよし陣中にひろまりける程ニ互ニ怪しミ
疑ひ一決せさる事なりける處小西摂津守被申け

内務省

るハ黄門の別心さのミ怪まるゝに足らん能はず
る合戦の最中に味方に背て裏切に逢ふ事ハ
ゆゝしき大事と被申ければ治部少輔黄門味方
に背て反逆有りとも此方より敵中へ内通し
て裏切の約諾有之ハ是非角迄も疑ひ給ふへ
からずとて申ければ其故を尋ね聞けるハ三成忍ひ
の使を敵陣へ遣はし赤坂の在陣の衆を味方に
語らふと云へとも與する人ハ無りけるに宮
部兵部少輔長房ハ昔の好ミをもおもひけん又
ハ大垣に妻子を置かれハそれに心や引れけん

三成が勧めに随て内通をぞ約しける内府岡山
へ着き給ふと聞て治部少思ひけるハ此節に臨
て急に心を変ずる事なり難かれとも手より
を引見けり田中兵部大輔忠政方へ申越けるハ
御辺の事ハ元関白秀次公の臣たりし故に太閤
の御不審を蒙り給ひ既に身上危き処に三成随
分執成申て付関白殿生害の後ハ無別条於此儀
ハ定めて御覚えも有るへし是全く三成が働に
非ずや然れハ今度御幼君の御為に忠義を致さ
るゝに於てハ遠江三河一円に可宛行者也其上

大坂に有る所の妻子以下早々可引渡旨其方云
遣はしけり因中此状を内府へ差上御披見ましま
入られける内府神妙の至り也感ぜられ余り有
り則同意の返答せられし謀ありと聞えけれハ兵
部少輔是を承り御定にハ候へとも此段御免候
へと申けれバ内府重て申所至極也左候書簡を
披露せられよとの心底なれハ然るに若し御神
文をなされ遣すべし文言をハ好に随ふべしと仰
られけれハ兵部此上ハ免れ難き御事に任を奉る人
きしと申けれハ則返状書せられ其趣ハ被仰誠通

り令承知畢然ども今に心を変し候事無面目候へ
ども大坂の人質之儀誠に以不便に候へハ今迄
の不義可有御免候て味方に可参候左候ハゝ明日
の合戦に裏切をして可仕候に忠改小身に候へハ
父子の人数僅に八百有りてハ無之候余り小勢
にて中々功を可立共不存候間此儀可有候
乱又ハ外に於ても忠改如きの儀も候ハゝ可被仰聞
候半合せて事を仕り候へし此儀令く後日に違ふ
ましく神文を書てまいらせ候へしと被仰けれハ忠改
畏り如件相認め治部少方へ差遣はしけるに三成

是我思案したるに田中が申通り余り小勢に
て裏切の甲斐なかるべし若又兵部太輔が表裏
ありて如此や申らんさあらば一味を申たりて
は以の外の越度ならん兎や角やあらんと案じ
けるが田中誓盟を以申出ければ相違は有べから
ざれ事実においては大きに味方勝利の本意捨
うべき所也兵書に謀は深かるべしと云へども
ざと有物をとかくさうしては宮部を補殿と第事被
仰合候へと田中が方へ云つかはし宮部が方へ
は田中は合相談有兼て申通りを忠改と諸事

被仰合軍の最中に内府の本陣へ攻入り候に極
しと云ひ送りけり宮部が方への使は来て書状
を届けるが田中が方への使者途中にて
討ける又落失せたるが終に来らずして止
みけり去る間宮部は田中が方へ使を以陣中万
事可申合旨花合戦に至ては一入ゆ旗に進みへ
きしと云を以去る田中は宮部が内通をは知らざ
りしかは以ての外成る事にやと不審してさのみ挨
拶もなかりける宮部はいと心許なく猶田中が
陣に人を附置て事の様を伺ひて諸事を差図せし

国立公文書館
National Archives of Japan

入れと申させられけり田中ハ心得ぬと思ひて只嘿り
居て計返答してさらぬ躰にて居たりける　田中
か家人来り知らぬ事なれハ宮部殿より人を付
置れたるハ何事ならん心得難しと云合て宮部か
使ニ周ひ付守りけれハ使者も怪しミ急き立帰
り主人ニ斯と申けれハ長房初ハ此事田中が表
裏して三成を謀りけるんと大ニ仰天して周章
騒く事限りなし宮部ハ此事を家臣共ニ云談ると
さりけれハ主人の躰何とやらん事替りけるハ
りける者共やゝ暫く有て合図の時なり長房此様を見

て弥気おくれして家中の者ニも心を置き陣中
ニもこまり得も落度の外ハなかりけり家臣
共是直事ニあらす主人狂乱と疑ひなしとて急
き田中か方へ人を遣ハし此由を申させけれハ
田中梅てとく取放ち人を遣ハして外ニもや陣
家臣を思ひかけぬ落行を追懸け是非なく連れて帰り
けれハ人を添て松平和泉守ニ預り置人として送
りけり此との共を頼ミ玉ふ哉　治部少輔三成か
心底を推量しての事なり

土佐物語巻第二十六終

内閣文庫

明治九年十二月

木山正中
青松実清
校

明治十年十一月

[illegible]
[illegible]

国立公文書館
National Archives of Japan